

地球の真意(1)～(4)

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

地球の真意(1)

1. この地球に住む一生命としての人間にとって大切なのは、人間だからこそ経験し得ることではなく、ただ普通に、そのまま健康的に生きること。知るようになる、知らされることの殆どは、そのことを遠ざける中で生まれ、力を持つ。知る(経験する)ことに比重が置かれれば、知らなくてもいいことばかりを知る、意味の無い人生を生きることになる。それを意味あることと思う程、人間は愚かではない。‘人間だからこそ…’の姿勢は、地球の望みに応える時のみ使われる。

事の本質を理解する時、そのための言葉をその道具に事を進めても次なる現実には簡単には変わらないということの原因に対処するために、抽象的な表現を活かし、具体化のその元となる存在の質(原因)を高める道を創る。その作業が困難であればある程、そこに在る本質の意味は大きく、そんな時こそより抽象度を強め、その原因の中に漂うという、普通ではあり得ないその世界での普通と、それによる新たな普通の変化を楽しんでもらう。そこに、太陽系の天体たちも、喜んで参加する。

そして、そこでの経験は、向かわず求めずに居るからこそその普通自然体の原因も手伝い、気づけば、思考の外側となる多次元的感覚(感触)を可能とする程、その質を成長させる。それがそうであることの意味は、地球感覚を普通とする生命本来の原因が、そのことで一層具現化され得るということ。そのために在るこれまでの知識が(その材

ば、すでに気候は、かなり本来からかけ離れてしまっていることも知る。

その気候関わりのその原因の学びとして在る、現代。そこでの何でもなし EW を通して、それらの原因が浄化されることを体験的知識の域に収められたら、ここに在る、健康的とは言えないこの環境の中から、健康的に、心のままに、人の暮らしと動植物たちの営みを変えていく。気候が変わるその時を待つのではなく、気候がどんなであれ、一生命としての人間時間を、人として生きる。共に生きる生命たちの安心を普通に、自然界を大切に作る。

不自然な気候が原因としてそこに在ったとしても、それを理由に生の質を低下させてしまえば、受容も実践も、地球感覚を外れる。「地球の真意」に触れることで変わり得る原因は、それが力強く回転して、不調和などどこにも無い自然な気候を引き寄せる力となることで、その役を果たす。ここに居る生命たちは、そのための EW と自由に遊び、確実に気候を変えて、環境を、時代を、生命本来のそれにする。自分たちの変化に、気候が反応し、気候の変化に沿って、それぞれが存分に生命としての人間を生きる。

太陽は、その輝きを増し、地球は、どんなところにも太陽の光を届ける。動物も植物も、太陽の元気を喜び、自然界は、不自然さを知らない気候を普通としていく。人間は、太陽の光に包まれ、何も無くても全てが有る時を共有し、それを広げ、高めていく。そこに争い事は無い。病気も不安も隔たりも無い。風と雨は優しく、雲はのどかな時を彩る。気候が、安心して地球の元へと戻る。(by 無有 2/10 2019)

かつては、太陽の光を海中のあらゆるところに届かせていた海。海水の循環は健康的で、海水温も大きなひとつのサイクルを滑らかに動かし、穏やかで柔らかな状態を安定させる。地熱は自然に海水に伝わり、太陽の光でそれは廻り、生命力の原因となる。

地球全体の平穏さと、生命たちの活動を支える、地球表面の多くを占める、自然で豊かな海水の環境。それが塩分を含んだことで、気候の大切な材料となる水分の循環は滑らかさを失くし、海と太陽との繋がりも不調和となる。そこでも、静電気が悪さをする。

地球には無いはずの不安定な(原子核の)粒子がその成分となる、海水の塩分の中身。静電気が喜んでそこに住み着き、非生命的な海水空間を作り続ける。太陽の光は、自由な働きを削がれ、風や雨は、その海水の影響を受けて、地球本来から外れた気候の材料となっていく。

そこに在る、凝り固められた負の原因から離れ、そうであり続けるその重たい連鎖が砕かれるであろうその時のために、海の塩関わり(の次元)を無くす流れを馴染ませる。岩塩の成分とそれらの原因との融合は、廻り回って、地球環境とそこでの気候の質を本来にする。海の塩に支えられた環境(価値観)は、それだけで、無くてもいい気候変動のその形無き土台となる。

8. 気候によって、人の暮らしや動植物たちの営みが、そうとも分からずにその深くから影響を受けていることを知る。そして、人の切ない感情や動物たちの悲しみがそこに在れ

料に)自由に使われ、時を癒す力強い意思が、思考の域(次元)を超えてそれを通るということ。

「地球の真意」は、「復活」によってその基礎を確かなものにする、生命体関わり(の)その(原因の)具現を躍動させる。心ある人たちの、(心ある風景での)軽快で健康的な身体表現のその普通の質を高めていく。そこでは、ひとつひとつの言葉(知識、発想)によるEWが、細胞たちに安心を届ける。

2. 健康的な身体表現には、体(細胞)が嬉しい食物と水と空気がその大切な要素となるわけだが、その基となる次元では、体を作る構成成分における、そこでの健全な融合と調和ある仕事の質が重要となる。その人の体の(化学)成分では、水分の次に多く在る、たんぱく質。体の中でたんぱく質の担う部分は限り無く細部に渡り、その仕事量も、基礎の要素でいる役割も、実に大きい。その世界に在る知識を間口に、遊び感覚で、その原因の中に入って行く。

「復活」で水素1や酸素17(18)の世界を把握した経験はここでも活かされ、繰り返しその質を高めた左回り(左回転)のEWは活躍する。たんぱく質を成す、アミノ酸の2つの基(アミノ基、カルボキシル基)。それを左方向へと回転させてみると、不安定な(嘘の安定を持つ)原子のその歪な力の働きを、その時の感触の違いを通して、それぞれ感じ取ることが出来る。

窒素を含む有機化合物として在る、たんぱく質。EWを進めていくと、その窒素を含むアミノ基より、カルボキシル基の方が手強く、厳しさを伴うことが分かる。そこに在る炭

素の世界。アミノ酸の中に隠れた、(多数がそれを良しとする)負の力である。

太陽からの炭素(9章)との融合は、たんぱく質の世界とも繋がっていて、その時の感覚的(体験的)知識は、この今の土台となっている。地球と太陽が喜ぶ原因の中に居るからこそ容易に触れ得る、細胞の分子・原子の次元。そのことへの EW を楽しむ流れに乗り、より深く細かな原因から、生命世界を癒す。たんぱく質のその原因を本来にする。

3. アミノ酸合成に密に関わる、酸素と水素。人体を構成する元素のおよそ65%を占める酸素が不安定な世界と無縁であれば、身体細胞の自浄力も力強いものとなる。構成比10%程の水素が不穏な様を見せていても、酸素に余裕があれば、細胞たちも、要らない負荷を覚えなくて済む。

そうであるその理由を遡って行くと、そこには大気の成分の異常が在る。大気の構成元素は、窒素がその80%程を占めるが、その割合自体、元々は無かったもの。現在20%程の酸素は、今よりも少し多く、その質も違っていた。それが崩されたことで、地球は、それまでの普通を無くし、地球自然界も、無くていい経験をするようになる。

およそ11億5600万年前、この地球の次元に、それまで存在しなかった、異質な(不調和な)アルゴンが誕生する。他の物質と反応しないそれは、その異常を普通に、循環もせず、留まり続ける。大気成分では僅かであるが、その割合は3番目(なのに、なぜか人は知識としてそれを知らない)。その物質の原因の性質に対応するEWは、廻り回って、体の中の酸素をも元気にする。

6. 脳の中に居座る静電気(静磁気)を、地磁気や地電流を刺激しつつ解放し、それ関わりの経験の記憶(の原因)を段階的に浄化し得た、これまでの確かな時。気候は、人間経験のその本質となる部分にまで気づかれずに影響を及ぼすものであるゆえ、それへのEWは、求めず、向かわず、ただ原因のままの自由な遊び心として表現する。厳しさも辛さも全て不要となる気候を、遥か昔の風景からここに招待する。

そこでは、太陽の光に仕事をしてもらおう。太陽の光を避けようとする、(空気中に在る)本来そこには無くてもいい不穏な分子(原子)は、誰よりも太陽が知る。彼に、その力無くさせられた空中電気(空気中の電気と静電気)を包んでもらい、そこに在る歪な粒子も含めて、酷い寒さや暑さの元を浄化してもらおう。これまでのEWを経て、太陽の普通は、その光(輝き)の力を自由に活躍させ得る本来を手にする。空中電気(電流)も、この時を待っていた。

太陽にも有る、彼が誕生した時の、その手前となる原因。太陽により元気になってもらうために、94億6443万年程前のその時の、その1年前の太陽を感じてみる。それを普通とする無有日記に、彼も嬉しい。その時の彼の想いに触れ、改めてこの今を生きる。生命たちには、とても懐かしい時である。

7. そして、人間がそこには住めないために、それは思考の外側となるが、海の気候への影響は大きい。海は、地球自然の生の源である。

5.3 百万年近く前から始まった、この地特有の火山活動が、数十万年の時を経て次第に落ち着き出した時、そこでは、地域によって平均気温が大きく違うという、それまでは無かった妙な現象が起きる。太陽の光の力を思えば、地球の中で寒々しい地域が有ることは考えられない。その異常がこの時生まれ、この現代まで、それは抗えないものとして続く。

そうなってしまった理由にはいくつもの原因が複雑に絡むが、最も重要な理由としてそこに在るのは、空気中の電流(空中電気)のその不本意な姿。地中から放出された静電気は、空中ではそう簡単には消えることはなく、すでにそこに在る不調和な(非地球的な)粒子に支えられるようにして、それは、異常を普通とする働きをする。

極端な寒暖の差は、本来の自然な流れを忘れた空中電気が、無生命化を愉しむ意思によって操られているため、静磁気が活動的でいられる地域では、それに反応する空中電気が太陽の光の力を簡単に遮り、寒く厳しい時が作られる。都合良く移動するだけで、流れることのない静電気は、空中の電気の流れを滞らせ、熱の伝わりを鈍くさせる。地球にとっては、地殻を流れる地電流の健全さが重要となるが、地上で生きる生命にとっては、気候をある状態に固定させる空中電流の存在感の方が大きい。

「復活」で静電気の正体(本質)を知り、重力子や電子の実際(次元)にも触れた経験は、地球が本来の気候を取り戻すための、その力強い原因としての新たな仕事を喜んで担う。ここに居るということは、そういうこと。みんなで、地球らしい地球の気候を創り出していく。

かつて存在しなかったそのアルゴン 40(18+22)は、それまで空気中には無かった不自然な酸素(同素体)を生み出し、生命たちに負荷をかける。後に外からの放射線の影響にもより生まれた不調和な酸素(同位体)もそれに加わり、自然界は厳しさを強いられる。

地球を弄ぶようにして、その無生命化を愉しむ意思は、地球本来ではないその物質をその空間に侵入させ(染み込ませ)、好き放題地球を病ませられる下地を完璧なものにする。それにより、大気の上層(圏)の性質も変わり出し、太陽は、(地球への)仕事のしにくさを覚えさせられる。生命誕生より遙か昔、地球は、その生命源からなる働きかけの基本を外され、微生物たちだけが、それを知る。

4. 体内に存在する量が最も多いミネラル、カリウム。筋肉の収縮や血圧の調整、及び余分な塩分の排出などの仕事をするそれは、身体の細胞活動に欠かせないものであるが、その世界の原因深くに入ってみると、面白い事実が見えてくる。細胞たちの辛い気持ちも伝わってくる。

原子番号 19 番のカリウム。なのに、(陽子と中性子が同数の)カリウム 38 が存在しない(ことになっている)。体の中には、不安定でいながら、安定を維持する不自然なカリウムばかり在り、その中には、天然放射性物質(自然内部被ばく)のカリウム 40 も僅かに在る。その事実は、地球に生きる一生命としての人間にとって、実にあり得ない姿である。

地球と融合する人間にとって必要とされるのは、左回転を普通とする、カリウム 38 である。その当然の話が全く通

用しない中で人間が生きているということからも、人間世界という次元に潜む、その非人間的な原因の本質を知ることになる。カリウム 38 を切り離されながらも、それを受容しつつ、自然界に支えられて生きる人間。その原因を受け付けられない不調和な原因を基に、自然界を切り離して生きる人間。カリウムというミネラル分を通して、人間以前の生命の意思の中身が顕になる。

土偶の原型となる生命体を生のルーツとする人間たちによって不要とされる(無きものとされる)、健全なカリウム。しかしながら、それは、人間本来を生きる生命たちの中で生き存える。歪なアルゴン出現絡みで(主となったカリウム 39 によって)その仕事を完全に押さえ込まれたカリウム 38 であるが、地球は、決してあきらめず、自然界と共にそれを繋ぎ得、人はそれを手にして、その本来を本能的に守り続ける。

人間が本来の生命体としての生を生きる時、細胞レベルの原因も、それに合わせて本来へと動き出す。永い時の流れをさらりと消化するカリウム 38 も、内なる力とその表現力を思い出す。彼は、とにかく力持ちで、健気で可愛い。

5. 健全な感性に連れ添えることが何より嬉しい微生物と、彼らと共に居る細胞たち。彼らは皆、太陽が好き。そして、太陽と遊ぶ生命たちの、その平和で健康的な風景に安心し、そこで癒される。太陽の光は、地上に生きる全てにとって、一番大切な生きる力。

その光が地球に充分に届かなくなってから、永い。それでも地球は、その分を補うぐらい活発に自らの生命力を高

米、餅 etc.)や海塩を常食とするだけでも、不健全な湿度を支えているということを知る。

4. 巨大な太陽の光に包まれる地球は、どこの場所も、温暖で爽やかな気候を普通とし、そこに生きる生命たちは、その中を自由に行き来し、自然の一部となる。気温は、寒過ぎることも暑過ぎることも無縁で、地球は、いつ、どの時も、全てが楽に平和に生きられる空間を太陽と共に工夫しながら創り続け、微生物がそれに協力する。

ところが、その普通は、海水が塩分を含み始めた頃から崩れ出す。地球にとって要らない経験となるそのことで、大気の成分は段階的に不自然なものへと変わり出し、水蒸気の質も、太陽の光を違和感とする程その様を違わせていく。海水の塩分濃度の差異は、不穏な影響力の原因となって地上空間の熱の伝わりを狂わせ、太陽の光が(地面に)届きにくくなる地域や、放射されにくい熱空間が次第に生み出されていく。

火山活動を余儀なくされた数百万年前、地球の生命力を押さえ込もうとする静電気(静磁気)の動きは活発で、それにより、地磁気からの磁力線と地電流の働きは、本来から外れる。それでも、静電気のかたまりを次々と地中から放出し得たことは、地球にとっては実に大きな安心の材料となり、どうにかその生命活動を修復する機会となったそのことで、地球は守られる。しかし、それまで平穏を保っていた地上近くの大気は、気温差を生じさせるという、大きな犠牲を強いられることになる。

程)となる。健康で平和な風景には、高湿度の空間は無い。

3. 高湿度の空間は、心ある感性を脆くさせ、心身の快活な動きを封じようとする。そこに隠れた静電気の、その動きを止める異様な力。その空間を良しとする世界発の価値観は皆、非生命のそれと理解する。湿気は、心の無さと相性が良い。

元々それ(妙な湿気)が無かったことを知れば、取るべき選択と行くべき先が分かる。太陽の光を遮るようにして在る物や居る存在を、生活の中から切り離す。過去に居座る流れない価値観から離れ、人としての滞りの無い原因を生きる。そんなところから、静電気が力を無くす流れへと時は変化に乗り、30%前後の湿度の心地良さを普通とするようになる。

変温動物の中でもその異質(変質)度を強める蛇の居る地域で、それ関わりの価値観や習慣を脳に馴染ませていると、爽やかで健康的な(湿度の低い)空間に居ても、心身を病ませてしまうことがある。それは、その人の本心が、滞りを望み、調和ある在り様のその原因にも違和感(嫌悪)を覚えているから。(そんな人の影響下に居て心身を病むこともある)蛇絡みの全てから自由になり、そうではない心身を育んでいく。

静電気(静磁気)は、気圧にも湿度にも密に関わっており、そこに居る人間の性格や気性にも絡む。そうとは分からせずに暗躍する、静電気。それへの EW と遊び、普通に健康でいるその底上げを楽しむ。精白穀物のパスタ(パン、

め、地球時間に付き合う微生物と、彼らに支えられる生命たち全てを生かす。太陽も甘んじてそのことを受け止め、可能な限り光を注ぐ。

そして今、思いがけずその原因の力を高め高め得たここでの更なる普通で、地球を楽にさせ、太陽を安心させる。その気もなく普通の質を低下させざるを得なかった生命たちにも、元気になってもらう。そのために、太陽と地球との繋がりの中で、癒されないままに痛みを癒す。それは、大気圏の上層。

大気中の酸素の質が低下し、その構成成分(原子)の調和が乱れ出した、11億5千万年程前(アルゴン40出現後)。そのことは、時を経て、地表の次元から大気圏全体を病ませる程のものへと発展し、そのおよそ1千万年後に、現在熱圏と呼ばれる、それまでは無かった不穏な空間を大気圏の最外層に生み出してしまう。かつての肉食巨大動物(恐竜)や、この数万年間の、他の痛みを食べる非生命的存在(人間)のその非地球的な原因から力を貰うようにして、それは、太陽が辛さを覚える程、その停滞型の密度を強める。

地球の動きを止めようとする意思(の働き)も絡むその層を、これまで以上の遊び心で、左回転に付き合わせて楽しんでみる。そして、その頃よりも前の、その異様な姿が全く無い時(11億4500万年前)のその場所との融合を高め、太陽に力を与える。変化し続けるこの今の原因と、その頃のそれとが重なりひとつになれば、現在の熱圏へのEWもしやすくなる。太陽にしか出来ない彼の普通の力で、人間には難しいことを行ってもらい、共に次なる未来の原因を

力強く膨らませる。太陽も地球も、生命たちも元気になる。
(and 11 億年分の大気の病みの蓄積の(その痕跡となる)
電離層と呼ばれる空間も、その原因から浄化される)

6. そこにアルゴン 40 が在るといふことのその理由深くに
潜む、人間の知では永遠に触れ得ない次元の、不可思議
な意思。しかし、知識や経験の外側で形にならない体験的
知識のその原因の質を成長させる中で、その物質の本質
は、否応無くこの無有日記に反応する。全く反応しないとい
うその個性は、返ってそのことが地球感覚(の原因)の中で
異物化し、その中身が難無く観察され得るといふ、ここでの
普通の材料となる。

太陽の光が地上に注がれるのを阻もうとする意思のそ
の通り道としての役を喜んで引き受ける、アルゴン 40。彼
は、静電気の仲介のような役も担い、黒雲の出現とその働
きかけにも密に関わる。それは、不安定感や不健全さのそ
の重量級の原因でい続ける。

カリウム 40 の仲の良い相棒のようなアルゴン 40 は、
体の中に在るそれと共謀して、(普通の人)が静電気が流
し込まれるその道とそのため要素としての仕事を愉しむ。
理由の見えない傷(痛み)を生み出す静電気(and 放射性
物質)の衝突にも、趣味感覚で参加する。

不活性であることの特性を活かして、細胞たちの心強い
支え役で居ようとする、アルゴン 36。そのことを利用して、
気づかれずに細胞たちに負荷をかけようとする、アルゴン
40。そこに在るそれぞれのその原因の働きを観る時、自ず

2. 静電気を含む水分が、湿気(湿度)として、空気中に停
滞する。自然に生じる水蒸気にはそれは無く、海や川の水
が普通に循環する時、空間はジメジメとした湿度とは無縁
でいる。それを知ること、これまで経験することのなかつ
た新しい風景(気候)を知る時を引き寄せる。

意外過ぎる意外として、その不健全な湿気には、蛇が絡
む。静磁場と化した蛇が住み易い場所では、空間の流れを
止めるように湿度は高く、そうではないところでは、蛇(の本
性)と融合する人間が、静電気脳を活発化させる。この地
での異様な程の湿気も、彼らによって下支えされてきてい
る。

その非地球的な動物の代表となる、蛇。彼らの感覚器
官は、初めから破壊力の道具として有り、腐敗と停滞の原
因を普通に、混乱と衰退を演出する。その目は、前にも触
れた、静電気を上手く操る、静磁気のかたまり。そして、形
を生み出す原因の次元を漂う時、そこには、その静電気を
絡めて重苦しい湿気を作り出す、蛇の鼻(の奥の部分)が
在る。それは、実に漫画のような、可笑し過ぎる、恐ろしい
原因の事実。

体の中で仕事をする栄養分を取り除いた食物(精白米、
白いパン etc.)でもその活動源が足りてしまう程、細胞が
不健全さを普通とする時、それに見合った形として、
50~60%(またはそれ以上)の湿度を常に欲するようにな
る。人間にとって大切なのは、静電気を含む空間から自由
でいられること。そこでは、空気も水分も健康的に流れて本
来の仕事を発揮するので、当然、湿度は 30%前後(~40%

地球の真意(4)

1. 気候は、そこに住む全ての生命にとってとても重要であり、それがどんなかで、そのままそれは、人間や動物、その他あらゆる植物、鉱物に影響を及ぼす。気候が不安定であれば、不安定な営みがそこには在り、安定していれば、その安定の性質に見合ったある種の定着がそこには在る。気候は、生命たちの生の在り方のその大切な基本要素であり、時空との融合の際のその基礎を支え続ける。いつ、どんな時でも、それは地球の息吹を健康的に運ぶものでありたい。

そこに争いの絶えない世が在るとすれば、その背景となる気候には、不自然さを普通とする歪な安定が在り、そのことを誰も意識することなく、そうである中での生を営む中で、人は争いを起こす。人々の暮らしの中で病気があたり前とされる時、そこには病気の原因に絡むような不健康な気候が在り、誰もそれに(それとの関わりに)触れることのない中で、人は病気になり続ける。

争い事や病気が経済や権威の材料になる程、執拗に病み続ける現代。人間の、生命としての成長・進化が外されたそこでの風景は、それが修復と自浄の機会を手に来ない程、それへの人の無感覚が慢性化し、生の営みの基となる環境も自然界も、後戻り出来ない程不健全(非生命的)になってしまっているということ。

そこに、不安定を安定させる、その大元となる気候がある。3章ではまだその時ではなかった材料を、新たにそのテーマに重ねていく。

と在るべき姿を知る。アルゴン 40 が殆どを占める、異常を普通とする不自然さの中で、アルゴン 36 を復活させる。

突然訳も無く生じる寒気や足の冷えにも関わるアルゴン 40 は、静磁気の病みの盟友で、太陽の光を遮る不穏分子団の幹部でもある。カリウム 38 とアルゴン 36 が、一緒になって動き出した。

7. 海水に含まれる塩分と、岩塩に含まれるそれとでは、それぞれのその原因に触れると分かるように、そこには全く異なる性質のナトリウムと塩素が在る。それは、原子(核)の構成が違うということ。その理由も、意味も、その原因の次元からだ、余りに大きい。

11 億数千万年前、地球空間の調和には欠かせない塩素(質量 34)が消滅へと向かわされようとするその時、その負の力をすり抜けるようにして、地球は、ナトリウム他とそれとの融合を計り、岩塩を生み出す。塩素もナトリウムも、それ以降非生命のそれへと変異する中、その岩塩の原因は、11 億年の時を経て、ここに繋がり得るという時を迎える。

現在存在無しとされる塩素 34 は、地球で生を営む生命体にとって何より重要な原因となる、生命の力。健康と軽快、平穏と躍動の燃料となるそれは、そのまま地球(の意思)を生きる生命たちのその健気な姿を支え、不調や不健全を知らずに生きる、普通自然体の彼らの在り様を応援する。岩塩が備えるその原因の中にそれは在り、心ある普通の人の中にも、備えるべきかけがえのない性質のものとして、それは在る。

不調和な塩素 35、37 ばかりとなる、この今の地球空間。そのために、素朴な感性を持つ人は、足腰(歩み)の重たさや動きにくさなどを経験し、理由の分からない胸苦しさを頭(首)への負荷も覚える。塩素の原子核(中性子の数)が不合になるというそのあり得なさの中では、物の純化力を難無く発揮する程のその(本質の)強力さゆえに、それは、あり得ない負の力へと変換されてしまう。

地球の望みのその連繋の原因でもある塩素 34 は、どこかに在るという次元ではなく、地球感覚という感性(生の基本)の中に在る。地球が自らのために守り通したその原因は、岩塩という形の中で生き存え、それと融合する生命たちの真の普通(意思)の中で活躍する。それは、一生命としての人間を生きる上で、不可欠な要素である。

8. およそ 1 億 3500 万年前頃、アルゴン 40 絡みの地球規模の特異な作用は、海水の成分にまで影響を及ぼす程となり、次第に増大する不自然な塩素がそこでのナトリウムと結合して、海は塩分を含むようになる。そこから始まる、生命世界の異変と、生命たちの限り無い受容。自然界は、地球が負荷を覚えることになるその異質な海水で、循環を不自然に、停滞感を帯びることになる。

不調和なナトリウム 23 は、海水に在り、地球の意思と繋がるナトリウム 22(の原因)は、岩塩の中に在る。海の塩分は、元々この地球には無かった成分を含むものであるため、健全な感性を普通とする人にとってのそれは、無くてもいい経験の材料である。細胞の中に染み込む塩分の浄化は、殊の外重要で、時に厳しさを伴う。

異様な危うさのために厳しく辛い時を経験してきているゆえ、それが段階的に確実に浄化され得るこの時、この今の原因の力をぐんぐん増大させていく。それは、現代のこの無有日記を通して為し得る、一生命としての楽しみのひとつ。石灰石も岩塩も、喜んでそのサポートをする。

そして今、実のところ、ここに居る生命たちの空間では、居場所を無くした静電気が次々と力を無くして、太陽の光で砕かれている。ここでの EW は、その道筋を確かにし、太陽は、余裕でその支え役を担う。地球の希望も大きく膨らむ。

地球の歴史と人間の歴史が合流するこの時、この今の流れを大切にす。11 億年振りにその原因深くから変わり得る天候の、その本来(の原因)のひな型は、この場所でのみんなの、そのさりげない変化。元気な太陽と遊び、地球の天気を元気にする。海も山も大気も皆、この時を喜んでいる。(by 無有 2/04 2019)

は、自在に天候を操り、重苦しい環境と動きの無い人間の感情(価値観)を支え続ける。

そして、静電気の移動である、偏西風や貿易風。地表空間の変化を滞らせるために、静電気は、至るところに在る静磁気(場)に反応するようにして、風となって運ばれる。海上で迷う大量の静電気が、その風に拾われて災いの道具に使われるその姿が、暴風雨(台風 etc.)である。低気圧も高気圧も、この地球には元々無かった、自然界の異物となる現象である。

9. 現在の気候の土台には、何億年もの間に地球が引き受けたいくつもの無くていい経験があり、しつこく固められたそれらの上に更なる負の現実が次々と積み重ねられて、この今にそうであるその姿を形にする。

そのことを知り、そこに在る原因の性質に触れることで成される、地球本来の意思との融合。これまでのその経験を基に、出来ることをし続ける。地球が嬉しい地球感覚を普通とすることで、何をしてもしなくても変わり得ることのその質を成長・進化させていく。

その負の土台がどんなに堅固であっても、非地球の具現化に利用されているのは、宇宙線(放射線)からなる不穏な原子と、静電気(静磁気)である。その静電気が処理され続けられれば、地球も太陽も、どうにもならない重石を外し、宇宙線への、それまでとは全く質の異なる対処の次元を創り出す。

ここに在り、二度と戻ることのない流れに乗る、静電気の原因への対処。心ある素朴な人たちは皆、静電気の

必須成分(元素)のナトリウムは、塩分(NaCl)から摂ることを常とする人間。そうであるなら、これまでの分の影響を修正・修復するために、地球の知恵として残された(自然塩ではない)岩塩を活かす。それと一緒に純粋なカルシウム分なども摂れるそのことで、そこでの EW には、細胞たちも喜んで参加する。岩塩に含まれる本来の塩素とナトリウムそれぞれの原因との融合は、彼ら(細胞)が何より待ち望んでいたこと(時)である。

そしてこの時、共に生き存えたカリウム 38 も、本来の仕事をし始める。その全てを、それまでに強く責任を感じていたアルゴン 36 は嬉しい。無くてもいい経験をずっと受容してきたこれまでを遠くに、健康と平和の原因を普通に生きる。地球は、石灰石やテルルだけでなく、岩塩も残してくれていた。

9. 海からの塩(塩分)は、それが地球自然界の調和が崩されていく中で誕生したものであるゆえ、そのことによる負の影響は、人間を通して多方面に及ぶ。この地の、生命力の無い食文化はその典型であり、全粒穀物食を避ける(精白された異様な穀物を好む)そこでの非生命的な姿は、海の塩分と重なる。形(形式、過去)にこだわり、他を隔てて結果を生きるというその非人間性も、自然界の不自然さの象徴である海の塩分がそれを支える。人間には、その海を変えていく仕事がある。

そうであることへの素朴な疑問が打ち消されることで、質を低下させていく普通。海の塩分関わりでは普通に疑問だらけなのに、そうで(そのままで)あって欲しいその異常を

肯定するためだけに、科学は迷走する(実を見失う)。その危うさの中に、海からの塩がベトッと染み込んでいく。

塩素 34 とナトリウム 22 を守り抜いた地球の意思に応える。どこにも無いことになっているそれらと遊び、地球からの生命力を細胞たちに届ける。それらが在ることのその理由の中に、海水への疑問の答が在る。そして、もっと元気良く、人間を生きる。

その時、体の中に在る、ごく微量の様々な金属性元素のその原因にまで触れ得る機会を手にする。塩素 34 は、地球が生み出した、純化の力。彼の元気にかかれば、どんな不純物も本来へと修正される。その能力を普通感覚で活かし、それらの左回転を楽しんでみる。それだけで変わり得る世界が勝手に動き出し、縁ある風景も、自然界が望む変化に乗る。

岩塩の原因との融合は、地球時間における連繋の意思との一体化でもある。それが普通に為されれば、成分を同じくする海の負の原因のそれは次第に浄化され、地球自然界の水分の循環からは、負荷が外れていく。地球は、海が地球のものであった頃のその原因を活躍させ、自然界全体は、分子・原子の次元からの浄化の時を経験する。その EW は、さらりと遊び感覚で行われる。(by 無有 1/07 2019)

地球は 63 億年。太陽は 94 億年。その原因からなる実が形となるこの今に、彼らは癒され、力を付ける。EW は、自動的にそれぞれのその誕生の時(空間)に触れ、地球と太陽と生命たちは、共に密に融合する。

8. 地電流の本来を刺激しつつ、静磁気への対応を重ねていくと、地球にとっての辛い現実が、今まで普通だと思っていたその場所から、そうではない違和感として伝わり出す。その一つが、北極地方の各所での凍結。その地域の地中に在る巨大な静磁気(場)のために動きを極端に鈍らされた地電流は、地磁気との連繋を失い、熱を伝える力とその一様化への調整力を奪われる。海水塩の負荷にもより冷たいままの場所となったところに次々と静電気が溜まることで、そこは、変化とは無縁の氷の世界となる。(地球は、天体にとって最も重要箇所となるその地域での火山活動は出来ずに、耐え続ける)

脳の中の静電気が地磁気関わりの EW によって浄化され出す動きは、当然のこのようにして、天候の本質に潜む、その信じ難い事実(正体)を顕にする。人が普通に知識として知る、気圧の変化によってもたらされる様々な天気。それらが皆、この数百万年の間に作られたものであり、そこにも静電気が執拗に絡んでいることを知らされる。

高気圧は、地上(地面)と大気内に在る異極の静電気(帯)同士が引き合うことで、空間(大気)の圧力が増し、誕生する。同極の静電気が反発し合うと、低気圧である。突風(暴風)も豪雨も、その元は静電気同士の働きによるもの。人の世の混乱や苦しみの風景を喜ぶ無生命化の意思

地球の真意(2)

候のその原因への EW を通して、人間世界の質も、その元から浄化され出す。

7. 地球の歴史上、11 億年程前の数千年間は、天体規模の負の枷となる(地球自然界全てに影響を及ぼす)程のことがそこで繰り返され、そうであったために、この現代の気象(気候)状況や気流・気団の性質は皆、浄化されないままのその影響の下で不自然に生まれている。

外核の(液体の)鉄の流れに影響を与えた、地殻・マントル内の地電流他の乱れは、11 億年の時を経ても完全に修復されることはなく、太陽の光に包まれても凍ったままの場所が存在する程、その影響は、大気圏の病みと共に地球全体に及んでいる。

その頃よりも少し前の時代の地球(大気、地殻、海)を感じると、体の中の水分やミネラル分が動き出す。ただ、その時も地球はすでに力を落としていたから、地球全体に及ぶ災いの原因をその後に被る流れになってしまったわけで、地球は、本当の自分の姿がそれよりももっと以前に在り、その時の地球の生命力(磁気、電気)との融合が自然に為される時を、この今に創り出して欲しいと、切なる望みを投げかける。それが 44 億年前のことであり、太陽の光も、その時の原因を活かして欲しいと、ここに顔を見せる。

そして、無有日記は、彼らのために、その頃を通り抜けて、それぞれが誕生した時のその姿をも包み込む原因をここに生み出す。そのことで、地球と太陽は、これ以上無い安心を感じ、更なる変化の時を、その原因を高めつつ生きる。

1. 地球にとって違和感となるものが、その不安定を力に安定へと拡大する中、それに危機感を覚えた地球は、それまでにそこに在ったものが無くならないよう、微生物の力を借りて、調和ある粒子の結晶化を試みる。他では、それを阻もうとする異様な粒子が地球全体を覆う程であったため、その仕事は太陽と共に急がれる。度重なる地殻変動もそれに活かされ、続く未来の全てを地球は知っていたかのように、天体規模の凍結が酷く広がる前に、その作業は完成する。そのまま現代までそれは残り、時代を突き抜けて、未来へとその原因は繋がりに行く。それが岩塩である。

地表の次元にそれが在ることで、地球は全く病んでなかった自分を忘れずに居られ、どれ程の不調和な粒子(原子・分子)に侵されても、そうではない成分を守り続けられることに望みを重ねる。

微生物は、地球に応えようと、生物が必要とする基本要素全てを備える岩塩のその原因を力に、植物を生み出し、動物を誕生させて、地球空間への浄化の仕事を担う。そして、そこに人間も参加する。

生物の細胞活動において、酵素と呼ばれる、そこでの微生物の仕事。その原点は、岩塩の中で元素たちの融合を支えた彼らならではの経験にあり、その独特の磁気によって、地球は助けられ、彼らもそれを嬉しい。アルゴン 36 の意思(岩塩のその必要性からなる原因)に再び触れた微

生物は、「復活」から「地球の真意」へと、その遊び場を広げる。

2. 現在、海のある場所には、当然初めは水は無く、地球ならではの変動が繰り返されたことと、太陽の光の力による大地と大気その質の変化によって、およそ 34 億 8 千万年前、そこは海となる。その時から海水に溶け始めた、ナトリウムと様々な性質の物質。もちろんその時のそれは、ナトリウム 22。不調和を知らないそこでの水の成分は、大地を潤しながら、地球全体を循環し、後に地球と共に活動することになる微生物たちの、その自由な表現の場(材料)となる。

その海水に含まれるナトリウムが不安定で非生命的な原因を備えるナトリウム 23 に変わり出したのは、11 億 1700 万年程前。そこに至るプロセスには、大気中の酸素の不自然さと、熱圏と呼ばれる層の変質が在り、そこにもアルゴン 40 が関わる。11 億数千万年前、地球自然界は、実に厳しい経験をする。それは、この今の地球環境の重量級の負の枷のようにして、その原因深くに在り続ける。

地球の海が、外からの不穏な意思の力に侵されることもなく普通であった頃の、そこでの風景。そこに在るその原因の性質は、それまでの普通の連なりのそれであるゆえ、ここに居て、これまでを癒すその大切な材料に、それとの融合を活かす。11 億 2000 万年前の海水を感じ、そこに自らの原因を重ねて、心身を漂わせる。心ある風景を生み出そうとする体の中の水分が、思いがけず安心を経験する。

6. 地球が背負ったままの痛みを癒すためのこの EW は、それに刺激され、共振することで本来を呼び醒まされようとする地球の意思の力(地磁気、地電流)を元気にする。活用することで、それは活力を取り戻し、融合することで、安心の中で歩み出す。

その時、海も大地も病んではなかった 11 億数千万年前の時を通り、地磁気と地電流が最も健康で元気だった時の、それぞれのそこでの原因を、この今に案内する。それは、およそ 44 億年前。その時の地磁気(地電流)をそのまま EW の柱とすることで、静電気(静磁気)は、どんなに細かく、薄いものでも、顕にさせられ、居場所を無くしていく。

そのひとつひとつが、この地球自然界の、そこに在る歪な気候を変え得る道となる。地磁気も地電流も、地球の生命力の形。その働きを阻んでいた静電気と静磁気は、人間版のそれらへの浄化を経て、呼応し合う地球と人間の間で、確実に砕かれ、処理される時を経験する。気候変動や不健全な天気の下支えとして、その原因に加担する心無い存在たちも、静電気の力を無くし、変わらざるを得なくなる。

静電気を溜め込む生きた静磁気(場)としては、これ以上の存在は無い、非地球の原因そのものの蛇。それを考えれば、蛇絡みの(蛇の存在をその背景に持つ)価値観や蛇を何かと意識する思考の世界は、そのまま不自然で不健全な(重苦しく、厳しさを伴う)気候の原因ということになる。そのことを余裕で理解の域に収め、その次元が存在意義を無くす流れを、人間本来の体験的知識のそれとする。気

5. 宇宙線絡みの無生命化の意思が、地球空間に入り込み、それが地球内部をも侵したことで廻り回って生じるようになった、気候の変化。その挙げ句、地中を流れる電流は、予期せぬ不安定な状態に陥り、気候は、不穏さを普通とする。

その地電流を、この無有日記の EW の次元に招く。そして、それと同時に、地磁気関わりのその原因の力を増幅させ、地殻レベルに染み込む非地球の意思の形を、処理・浄化する。その時、「復活」で触れ得た、静電気に対する地磁気特有の作用が活かされる。

静電気は、体の中(特に脳)に幾層にも渡って多次元的に蓄積する。無自覚のまま不調の元として在るその場所の静電気に、地磁気を絡めてみる。そのことから始まる動きは、より一層縁ある空間のそれを変え得る力となる。静電気を生きる源のようにして生きる存在たちも、そのことに反応する。気づけば、脳の中の負荷が外れ出す。

そして、静磁気にも、同様に対処するために、地電流を使う。特に脳の中のそれには、地電流が力強く活かされ、無くてもいいそれ関わりの通り道を遮る手段にも、それは活躍する。

冷えやすい足や手のその理由には、脳の中にしつこく居座る静磁気(静電気)がその原因として在り、地球感覚を普通とする人のその試みは、不自然に重苦しく、異様に寒い地域の、その不健康な気候の原因まで浄化する機会にもなる。地磁気を静電気に、地電流を静磁気にそれぞれ対応させ、地球が嬉しい原因(知恵、思考)を普通とする脳を安定させていく。

水蒸気となって大気を旅し、山々や草原に降り注ぐ雨となって大地を流れる、水と遊ぶ微生物。海水は、彼らによって運ばれる、地球が嬉しい物質(ミネラル etc.)によりその成分の健康を保ち、風や雨の姿のその健全さを普通とする。海も川も湖も、そこに違いは無い。

3. 永い時を経て、地球空間は、宇宙線(放射線)の影響もあり、その大気中の構成要素には不調和感が蔓延する。そこに在る歪な物質(粒子)の不安定力が生み出す不穏な安定も普通となり、海の世界は、やむ無くそこに引っ張られるようにして、その質を不自然なものにしていく。

およそ1億3500万年前、塩素35とナトリウム23との(イオン化を経ての)結合が地球規模で成され、海に塩水が誕生する。自然界の基本として何億年もの間育んできた海がその姿を大きく変えてしまうそのことで、地球は、その営みの大幅修正を余儀なくされる。海と陸地は、それまでの自然な融合を切り離され、生命たちは皆、それでも生き存える道を探る。雨(雲)も風も不自然さの原因を備えるようになり、地球と太陽の光との自由な繋がり、次第に不自由なものとなる。

大気圏の上層の質が崩されて、太陽がそれまでになく負担を覚え始めた時からおよそ10億年以上も経た後の、その海水の変化。その信じ難い様変わり、地球はただひたすら耐え、それが浄化され得る新たな原因の時を待ち続ける。そして、ここに在る岩塩と、この時の、微生物たちの生の微調整。生命たちは、この「地球の真意」を「復活」と共に自らと重ね、地球の望みのその原因そのものを生きる。

岩塩と海塩には、自然界の真と偽の現れ程の違いが在る。それぞれに在る塩素とナトリウムの次元の違いも大きい。両者が(人間世界に)同時に在るこの現代の様は、地球にとってはあり得ない現実だが、そうであることをそのままにはしない次元の働きかけにより、その原因は修正される。人間にとっては、永遠を超える1億年もの間の、海と地球のそこでの要らない経験。それは、その次元にも触れ得る生命たちの原因の進化により、(本来の海へと動き出す)次なる未来への、創造の経験の材料となる。

4. 外からの負の威力によって海がそれまでに無い姿を見せても、地殻の内部までが侵されることはなく、大気が不調和を馴染ませてしまう程になっても、自然界は遅く、地球と共に生きる。そうであることをそのまま受容することしか知らない動植物たちは、その姿勢が力強い生の原因であることを本能的に知り、その全てを地球に預ける。多次元的な知恵を普通とする地球は、その時々の変化の必要性に余裕で対処し、太陽の光に活かされつつ、創造の時を生きる。

そのしづとさとそこに在る強大な変化の力を潰し切ろうとする存在の意思は、非地球的(原因の)物質のみで生み出されて増大した、(元々地球には存在しなかった)腐敗型の蛇を活かし、地球の内部に強力な負の原因を流し込む企てを講じる。それはまるで恐怖漫画のような、それは無いだろうの突飛過ぎる話。ただしかし、その次元の浄化によって変わり得る世界のその重要さに触れる人の中で、それは、経験すべく原因のままの、普通感覚のそれとなる。

4. 地球本来からかけ離れた気候の、その原因となる背景には、何をしても到底近づけない次元の、余りに強力で高密度な破壊力を備える存在が、他との一切の融合を許さずに居座り続ける。

しかし、限り無く中庸でいつつ、生命本来でいることによるそこでの望むべく地球感覚(の原因)は、少なくとも、それをそのままにはさせない働きかけを普通とし、その連なりを進行させる中で、人間だからこそ為し得るEWの質を高めていく。

そして、その時になれば全てがさらりと処理し得る状態のその原因へと自らを成長させ、それ以前には考えもしなかった、その(次元の異なる)負の存在の威力をごく普通に着々と浄化してしまっている自分の姿が、そこには在る。

人間の住む環境でのそこでの気候は、それにより変わる。そうであろうとする道しか知らない生命たちの、その力強い意思表示により、太陽も地球も、自分たちにしか出来ないことを行おうとするその時を、満を持して突き進む。その部分(次元)を人間世界で処理してくれれば、後は自分たちが…と、その勢いも本格的になる。

そのために、向かうべきいくつもの場所を向かわずに引き寄せて、その意識もなく自然にそれらを通り抜けて来たこれまでがある。「再生」の時は、どこにも「復活」は無く、「復活」の時は、この「地球の真意」のことはほんの少しも予想すら出来なかった。それだから意味がある。ここに居て、次なる普通(EW)を楽しみ、この地球の気候を地球本来のそれへと変えていく。

3. 地球内部のその中心近くまでが外からの負の影響を被る程のそこでの災いは、地殻内の様々な流体(マグマ、水、蒸気 etc.)の動きをも不自然にさせ、地表世界の在り様にもそれは及んでいく。地球表面の気候は、大気成分の不調和感からだけでなく、地中からのその流体の変異・変動によっても様々な影響を受け、その本来の普通を崩されて、不安定を慢性化させることになる。傾いた地球は、それをどうにも出来ずに、地球らしさを忘れたまま、いつ変わるかも分からないその不穏な様の中を生きる。

調和ある生命力表現(の在り方)を大きく崩された地球は、見る見る変わり行く地表世界の姿に辛さを覚えながらも、守るべきところは守り、やむ無く手放すところはそのままに、回り続ける自転と公転を永遠の仕事とする。外核内の鉄の流動の質を元に戻せないそのことが天体規模の負い目にはならないよう、力強く、しなやかに、次なる原因を生み出し続ける。地球のその姿を、太陽は、本来の力を削がれながらも、全力で支え続ける。知恵と実践を重ね合い、共に協力し、可能性を拡大させる。

そんな中、対流圏と呼ばれる雲の発生する層には、重く、動きの無い停滞型の粒子が蔓延し、そこは、非生命的な色を帯びるようになる。気候の異様な変動は普通のこととなり、太陽の光は遠く、地殻も動く。地球は、息吹を押さえこまれるような負荷を覚えながらも、学びを重ねつつ、それへの対処をし続ける。そうではなくなるその時のための材料(石灰石、岩塩 etc.)を確実に生み出し、時を繋ぐ。

今から 290 万年程前、静電気が本格的に地中(地殻)に入り込む。それは数限り無く何度も行われ、地球は痛みを覚える。地球のどこにも無かった(地球空間にとって負荷でしかない)それは、地磁気の働きにも影響を与え、地中の生命力の流れを滞らせる。動きを止める、動きの無い(非生命的な)静電気。その通り道となる仕事を担ったのが、非地球の意思を具現化させる動物、蛇であり、彼らの目(の部分)が、そのための凄まじい静磁場として、その能力を発揮する。

5. 姿無き静電気(静磁気)のその破壊力については「復活」でも触れたが、それが密度濃く本格的に地球内部へと入れ込まれたのが、およそ 300 万年前で、その時以降、地球は、要らない負荷を覚え続ける。

そのための重要な仕事を担うためにこの地での生を手にしたような、異様さを普通とする蛇。彼らの体の至るところが停滞と腐敗の役を果たし、目は、静電気を幾層にも無限に溜め込めるといふ、この地球環境で最も危うい静磁場となる。他者の脳の働きを簡単に不自由にさせるそれは、他のどこにも無い特異な力として、無生命化の意思に利用される。

地を這う蛇の生態そのものが、地殻の異常(静電気化)を生み出すことになる、そこに在り、そこを通る静電気。同じ地上で生きる動物や人間は、それにより、動きにくさや不自然さを経験することになる。270 万年程前のそこでの人間は、蛇絡みの静電気によって、自由な動きを遮られ、脳も身体も、それまでは無かった厳しい時を強いられる。

地球は、地殻に居場所を確保する静電気(静磁気)のその破壊力を浄化しようと、無数の物質のあらゆる性質を活かして、その放出を計る。熱の力でその威力を弱めようとするその地球ならではの知恵は、そのための唯一の手段として、火山活動を起こす。莫大な静磁気と静電気のその処理作業の一環でもある火山噴火は、地球規模の負の影響力への対応として、繰り返し何度も行われる。(※それ以前の、静電気(静磁気)の放出とは質の異なる、地殻の変動を伴った火山活動は、主に地球にとって強力な負荷となるある物質の処理のために行われる)

6. 地球を知る数千の生命たちが人間経験の再開を始めたこの地は、他のどこよりも、静電気を注ぎ込まれる。「再生」では、状況的に触れ得られなかった、その事実。そのことのために、280 万年程前、この地では、火山活動が活発化し、いくつもの火山が誕生する。現存する火山も、火山帯という場所も、地磁気が危うさを覚えた300 万年程前からの、その静電気(静磁気)への反応の現れである。

その中でもより巨大な反応を示したのが、後に富士山となる場所の噴火である。不安定な状態を経験しながらも、どうにか今の姿へと落ち着いたのは、260 万年程前。それだけの破壊力が地殻内部で蓄積したことによるその活動は、地球の正直な拒否反応。そこには、地球の切ない思いが在る。

273 万年前、この地では、何年もの間太陽の光が遮られ、静電気が蔓延するという、実に恐ろしい非生命空間が作られる。時が止まるような腐敗型の粒子で包まれたそこ

力を備える宇宙線(放射線)が大量に絶え間なく降り注ぐ。その負の影響力は、次第に地殻深くまで及び、地球自然界は、それまでに無かった、暗くどんよりとした空気に包まれ、水と酸素の循環は滞りがちになる。

地球の体積の80%以上を占めるマントルにまでその負の力が届いた時、地磁気は、それまでの平穏さを乱され、そこでの恐ろしく巨大な地振波(振動)により、超高温の流体である外核の鉄(の海)の旋回にもムラが生じる。そして、地中を流れる電流(地電流)は混乱状態となり、地球全体は揺れを経験する。

およそ11億1300万年前、地球は、マントルの異変から、地球の歴史上初めて、微妙な傾きを経験する。しかし、それをそのままにはしない力も強力に働き、それはどうにか元へと戻る。ところが、地球の知恵が追い付かない程の打撃は続き、地球は、揺らつきを経験するという、実に辛い中での公転を延々と続けることになる。

その数億年後、地球の公転時の姿は完全に傾き、その歪な状態を固めたまま、今日までその不自然な(太陽にぶら下がるような)姿を見せ続ける。同時に、月は自ら回る力を無くし、太陽もその不本意さを受容する。その時からずっと、気候は、地球のそれではなくなっている。

同じ地表であれば、どこの地域も穏やかで、優しさと温もりに包まれていた、かつての風景。太陽の光と水と空気が融合するそこでは、生命力溢れる柔らかな粒子に全てが癒され、時は自由に、元気に変化に乗る。この現代の、その地域性からなるそれぞれの異なった性質の気候は、地球の悲しみの現れである。

地球の真意(3)

1. 何億年もの間、傾いたまま歪な姿を見せて公転する、地球。太陽の方を向いて回ることも忘れさせられ、元気の無さがそのまま形になったような廻り方をする。

「復活」では、その姿の事実とそこに在る形無き原因に触れることに焦点を置いたが、「地球の真意」がここに在る今、無有日記は、その理由と共に、その原因浄化の具現を試みる。限り無い永遠の彼方に在る、その地球時間での出来事を形に、それをそのまま、更なる進化を普通とする EW の原因に重ねる。

人間が知る限りのその知識の中に在る、世界中でのこれまでのそこでの様々な天候の姿。それらは全て本来のそれではなく、豪雨や猛暑、嵐や酷い日照り、極寒など、どれを取っても、地球にとっては不本意なものである。人間が動きの無い感情を歴史に染み込ませた数万年からの気候は、不自然さそのもののそれとしてそこに在り、それは現代に至る。

そして、その元となる、気候の質のその在るべき変化を尽く阻むようにしてそこに在る、地球規模の重量級の負の原因。それは、海水がその質を変えた(悪化させた)頃と時を同じくする、11 億年以上前の出来事。地球は、その時から、無くてもいい異常と不穏を大気中で経験し続ける。

2. 大気圏の最上層の部分(熱圏)が侵され、大気中のその構成物質(原子)が不調和なものへと変わり出した時、地球空間には、力無くさせられた太陽の姿を尻目に、破壊

は、蛇の巣窟のように暗くじめじめとし、人間は、脳をおかしくさせられる。今も尚、細胞深くの次元に在り続けるその時の負の原因を癒す。火山(富士山)の真を知り、真の普通を生きる。

地殻の原因が動き出した 308 万年前と、地殻活動(火山)とは縁の無かった 310 万年前のその 2 つを、この今と重ねる。細胞の意思は、より細かく、地球の意思と繋がり出す。火山の存在を知らないその頃の人間の、その心優しい普通の原因が、この今を通り抜けて、未来を元気にする。

7. 人間の世界から、動物たちが普通に備える彼らの能力を知ることは出来ず、自然界での彼らの自然な感覚や、地球(大地)の息吹との共振・融合などにおいては、全く感知し得ないものとなる。住み分けや協調を基本とする動物たちは、(肉食動物を除いて)感覚のままに互いを知ることを普通とし、その意識もなくそれぞれの生を尊重し合う。時に争うことはあっても、それは本意ではなく、共に生き、支え合うことを、彼らは本来とする。

そんな彼らでも、蛇の世界には、感じることも触れ合う感覚も持てない。争う対象にもなれず、ましてや融合などあり得ない。一生命としての生の基本を備えない蛇のそこでの普通は、動物たちにとっては関わってはならないものとしてあり、それに意識を向けることから被る感覚的苦痛とその回避を、彼らの本能は学ぶ。自分たちと同じ地上に居るはずのないその危うい事実を受容するしかない中で、動物たちは、ただありのままに生命を生きる。

自然の中では異質の域を遥かに超える、危うさそのものの蛇。その非生命的生を普通とする異常な姿は、人間にとっては、異次・異空のそれとなる。思考で捉えられるのは、形ある動きと食の様だけで、その本質には永遠に触れられない。姿無きその原因の性質が、非地球の意思を具現化するものであるということ。地球だけがそれを知り、それは、地球感覚を普通とする人間に渡され、彼らはその時(仕事)を担う。地球の真意が、こうして形になる。

蛇から見た時、人間の次元は、彼らの手のひらの上状態で、人間社会の質もそこでの歴史も、彼らは自由に操り、争い事や病気の絶えない時を愉しみながら促していく。そんなことはあり得ないと思いに力が入れば、それは、蛇が嬉しい人間でいることの現れ。その証拠に、病気や不安の無い環境のその原因を生きることはしない。

支配と暴力、腐敗と停滞、そして嫉妬と怖れ。人間世界に在るそれらのその原因を、恐ろしい程密度濃く潜めるのが蛇である。その全ては、彼らの目を通り、形無き次元でそれは、どんなところにも広がり、浸透する。地球の活動を不自由にさせる程のその負の力(静電気)は、蛇絡みの生を基とする人間のその否定感情(非人間性)を支えつつ、地球の無生命化と破壊を遊ぶ。

8. 「復活」の次元を楽しみながら通り抜けたことが、この「地球の真意」の時を誘い、ここに居る存在たちそれぞれが備えるその生命の意思を形にへと、新たな流れが動き出す。そこに在るのは、これまでの知識の次元が近づけない、これからを確実に変える別次の知識。それを知ることも、

そのことで変わることも、どこまでも普通。普通は、いつの時も変化し続ける永遠の生命世界と繋がっている。無限分の一の原因の世界も、それを支え続ける。

大気(圏)と海、そして陸(火山)をテーマに、それらの原因が形になったことで、地球空間は、かつての風景での生命活動を呼び醒まされるようにして、それまでにない安心・安定を覚える。地球時間にとってはほんの瞬間の中の瞬間でしかないこの数十年も、その原因全てがこれまでの何億年もの時を経てのものであるゆえ、これからの地球らしい地球時間のその土台に、それは(この時代は)成る。ここでの原因は、面白いぐらいに成長し続け、「復活」での希望も、「地球の真意」での本来も、普通にそこに在る。

この時代の、人間関わりの全ての負の出来事は、人間の数がほんの少しだった時代の、そこでの不自然で不本意な人間経験のその原因が元となっている。今現在も、その時の記憶は負の原因として残り、それを決して浄化させない妙な(蛇系の)力によって、時代は、どこまでも非生命的な現実を繰り広げる。

形ある次元で人間が捉えることの出来るその負の土台の中身が、EW と共に文字になったことで、形無き破壊の意思と繋がる蛇(の目)も、それ関わりで素朴な人間たちが経験した脳の静電気化も、この時を何より嬉しい地球と太陽によって癒される。地球時間の、その質の修正・修復が為されるこの時の人間時間を、地球に負けなくらい大いに楽しみ、生命としての原因を大切に生きる。地球の真意は、全てにとっての真の普通。(by 無有 1/17 2019)